

図書館を使った漢文教育

陶山, 由紀子
栃木県立宇都宮女子高等学校教諭

<https://doi.org/10.15017/9596>

出版情報：中国文学論集. 33, pp.22-29, 2004-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：published
権利関係：



〔小特集〕高校国語科における漢文教育の現状と課題一

図書館を使った漢文教育

陶山 由紀子

はじめに

本校は、所謂「公立の女子の進学校」と位置づけられる。進学校といっても、中高一貫の進学校のような実績をあげているわけではない。しかし、「公立の進学校」という点では、他の例にもれず、次のような問題を抱えている。すなわち、大学入試に求められる力と、高校入学までに生徒が身につけてきた力の差が、余りにも大きいということである。学習指導要領が改訂された学年の生徒が入学してくる度に、その現実に直面してきたが、この十年程の間、その傾向は益々強くなるばかりだ。

また一方で、このような所謂「学力低下」を招いたと言われる教育が「個性の尊重」「ゆとりの教育」「自ら学ぶ力」「新しい学力観」というキーワードのもとに進められてきたにも関わらず、「自ら考えることができない」「生徒が増えているという一見矛盾した現実も、目の前にある。自ら考えることができない生徒が、効率的に」「受験に不要な」学習を切り捨てていく風潮は、彼らの人間として生きる基礎力を弱め、結局、彼ら自身が望んでいる目の前の進路の実現をも妨げている。そのような悪循環を高校の段階でどのように絶つのか、我々は常にその課題と戦っている。

ところで、学校図書館法の改正により、平成15年度、つまり昨年の4月1日から、12学級以上の小・中・高に、「司書教諭」を置くことが義務づけられた。国語の教員が資格を取らされることが多いので、同学の皆さんの中にもご存じの方が多いであろう。本校では、私はその職務についている。この仕事は、面白い。ここには、生徒たち

に、自ら考え、知識を創造的に自分のものにしていく能力を、身につけさせる可能性が満ち溢れている。

以下の考察や実践報告は、学校教育に携わる一教員が日常行ったり試したりしているもので、発想としては、それほど奇抜なものではないだろう。ただ最近、国語科の教員である自分を、学校図書館司書教諭である自分が、常に支えてくれているような気がしている。もっと大きな社会や学問の世界に通じる「自ら学ぶ」態度を育てようという意識が、より明確に理論的に根づいてきた。その結果、調べ学習における実践は、本質を見失うことなく、より具体的機能的に、企画できるようになったかもしれない。

一 漢文教育の位置づけ

さて、「学習活動への支援」と「健全な教養を身につけるための支援」を考える司書教諭という立場になって、「読書」が、その基礎体力をつけるために如何に大切か、改めて感じている。例えば、国語の授業で言えば、漢字力・語彙力が著しく落ちていること、話の寓意や登場人物の心情が理解できないことなどは、読書活動によって培われる基盤が脆弱になっていることに大きく関わっている。物理や数学の教員も、それぞれの教科の学習に、文章を読み取って論理的に思考していく力が必要であるにも関わらず、その能力が落ち込んでいることを嘆く。読書は、このような能力を養い、あらゆる分野の学習と結びつく。そしてまた、その学習を通して、読書の質もあがるという相互作用を持つものである。

読書が、言葉を介して一つの思想を読む行為である限り、「国語」との相互作用は、当然他の教科よりも強く本質的なものになる。また、「国語」の形成に「漢文」が大きく関わっているのは周知の事実である。読書によって得た基礎体力が、「漢文」の学習を支え、その「漢文」から日本語の基本を学び、語彙や思考の型について理解を深め、更に質の高い読書ができるようになる。そしてそれは、他の分野の学習や人間性の基盤になっていく。

言いたいことは、「漢文」の力を培っていくのは、中等教育における「漢文の授業」だけではなく、同時に、「漢文の授業」は、「漢文」のためだけにあるのではない、ということだ。その意味で、漢文教育の果たす役割は大き

い。「漢文」と他の世界との間に、常に大きな通路が開かれていることを意識しつつ、その一方で、教室での「漢文」の授業が地道に行われていく必要がある。

二 高校入学後一年間―「国語総合」の理念を生かして―

現在、2学年の授業を中心に受け持っているが、平成15年度入学の、この学年の漢文指導についての実践を紹介する。新教育課程に変わった最初の学年である。

新教育課程において、本校では1学年で「国語総合」を履修することになった。前の教育課程でも「国語一」という、現代文も古典も合わせた一つの科目があったが、本校では現代文と古典を分け、担当者も別にして時間を組んでいた。しかし、ここに来てやっと、同じ担当者に一本化した時間割が組まれることになった。同じ授業を持つ担当者3名で、話し合いながら、様々なことを試みた。

ここでは、古典で読んだ世界を、現代の自分たちのものとして引き寄せて読み、自分たちの言葉で表現する、というような授業が違和感なく展開できた。

例えば、芥川龍之介の「羅生門」を読み、芥川の王朝物について学び、『宇治拾遺物語』の「絵仏師良秀」を読む。その後、芥川の「地獄変」と宇治拾遺の「絵仏師良秀」の読み比べをし、芥川の作品のテーマを探らせる旨の小論文の課題を出す、というようなことである。

それと同様のことは、2学年の現代文の教材、中島敦の「山月記」を読んだ際にもできる。「人虎伝」との読み比べである。その他、小さなことだが、「現代文」を読んでも、熟語の意味に触れる際、なるべく漢文訓読の形で読むようにし、「訓読」翻訳「解釈」であることを印象づけるようにしている。

また、言葉や文字についての疑問が出てきた場合、図書館でそれについて調べさせ、その結果を発表させる。例えば、現代文で、漢字テストをした際、「比喩」の「喩」の字について、『字統』(白川静著 平凡社)で調べさせて、プリントを作らせ、発表させるといようなものである。これは、年間を通して機会を見つけては、生徒に一

人ずつやらせている課題である。

このようなことは、以前にもやっていたが、現代文・古典とも同じクラスで授業ができる、非常にスムーズに話ができるので、生徒たちも「国語」という広い範囲での連続した学習として受け取ってくれるようになった。

その一方で、基本的には従来通り「漢文」の授業を進めていく。一年生の段階では、まず訓読に慣れることを、第一の目標とした。必ず授業中に各自訓読の練習をさせる。2人一組になって、お互いに聞き合う方式をとる。時間数が足りなくても、これだけは徹底し、訓読が重要であることを印象づける。

しかし、一人一人の訓読のテストをしている時間はないので、5〜10問程の白文を、読んだとりに現代仮名遣いで答えさせる「訓読小テスト」を実施した。事前に白文を配布して練習させたのだが、これは、白文訓読用にも、訓点をつける練習用にも利用していたようだ。そのような小テストで慣れた後、定期テストの問題本文は、全て白文で出すこととした。この一連の学習活動の中で、自然と句形などの基本事項もおさえることになる。

三「漢文」の授業における調べ学習 故事成語の出典を調べる

テーマ設定のねらい

2年生は、「現代文」「古典(古文・漢文)」という科目がそれぞれ独立している。「漢文」に関しては、教科書の教材を使いながら、地道に読んでいく授業が、もちろん基本である。高校に入学して一年もたつと、生徒たちも学習の仕方にも慣れ、スムーズに授業が進むようになるが、逆に生徒たちはそれに縛られる。どうしても教科書の体裁や読み方の枠の中からでることができない。

ある日生徒に、予習する際の参考図書として、明治書院の『新釈漢文大系』を紹介したところ、その部分の文章を探し出すことができない。彼女曰く、「『臥薪嘗胆』という題で目次にあがっているのだと思います。」授業中にも、出典の体裁やその文章の前後の話など、参考資料なども配布して解説しているのだが、生徒たちには、現実に欠けるのであろう。教科書の世界から飛び出して、広大な中国古典の世界を垣間見ること、またそのために必

要な参考図書や研究書の扱い方を学ぶこと、全員にこの体験をさせたい。これがこの課題の目標である。もちろん、先に述べた「自ら学ぶ力」を身につけるといふ大きな教育活動の中の一貫でもある。

具体的な方法と留意事項

具体的には、3人一組になって一つの故事成語の出典その他を調べる課題の形とし、担当3クラスで同時期に行った。調べる内容は、次の九項目である。

出典名

出典の解題

原文¹・白文

訓点付きの漢文

書き下し文

解釈

調べた本の書名・著者・出版社名

現在、日本で使われている意味

その語句を使う場面の創作

は、著作権や研究者の業績という点を意識させるため、また、複数の参考資料を使った場合、どの順番で調べていったかという、調査の経緯も評価したかったので、このような調べ学習では必ず入れることにしている。は、日本語（或いは日本文化）と中国古典の関係をおさえるためにも必ず必要なことである。

図書館を利用する調べ学習での一番の難点は、多人数が一齐に活動するので、資料の取り合いになってしまう点である。じっくりと取り組んで欲しいので、課題を準備する際にも、その点を特に配慮した。

まず、同時に課題に取り組むグループ（13グループ×3クラス）が、異なる故事成語を担当できるようにした。課題にする故事成語は、この学年が使う教科書では扱っていないもので、本校の生徒たちに持たせているレベルの

国語便覧二種類に挙がっている中から選んだ。更にその中から、現在本校図書館に入っている明治書院の『新釈漢文大系』を使って、調べることができるものをリストアップした。最終的に行き着く資料を、最低一種類確認する作業である。

また、の「出典の解題」についても、複数のグループが同じものを調べなくてもよいように努力した。但し、限られた資料の中からこのような課題を作るのは、さすがに難しく、同時展開の3クラスのすべてのグループについては無理だったので、1クラスの中で重ならないようにした。「史記」については、1クラス2グループになつてしまった。

次に、図書館にもこのような学習をすることについて説明し、協力を得る。と言つても、現在、その担当者は私なので一人二役だ。学校司書の方にも、授業の内容を理解と協力を仰いだ。

まず、関係の資料で、現在貸し出し中のものを回収すること。一年生に一人「新釈漢文大系」を借りている者がいたが、緊急性がないようなので、返却してもらった。また、関係の資料は、一定期間貸出禁止にする必要がある。具体的には、中国古典の並ぶ書架や、貸出力カウンターにその旨を記した張り紙をし、係の図書委員にも周知徹底させた。課題に取り組む期間は、約二週間とした。授業中、三十分程で課題の説明をし、グループ分けをし、担当者を決め、あとは、始業前・昼休み・放課後・土曜講座後の時間を利用させることにした。自分の担当以外のクラスとの進捗のバランスを考えると、授業の時間を、調べ学習に割くことは難しい。図書閲覧の時間も決められているが、平日五時以降、土曜日の午後も、担当者の私が授業のために認め、監督するという形をとった。学校行事や実力テストなどで、常に忙しい学校なので、時間の確保だけは、きちんとやらなければ、生徒は動けない。それぞれのレポートは、3クラス分を合わせて印刷して閉じ、自分たちの作った「小さな故事成語辞典」とすることとした。

授業の振り返り 反省と課題

『大漢和辞典』や故事成語や四字熟語の辞典の引き方を経験し、驚いた表情の子もいた。その後、出典名が分かり、目録からその関係の本があることを確認し、実際にその中国学関係の書架の前に立つ。複数の資料がある場合

は、両方を手にして内容を比べてみる。訓点の打ち方が違っていようものなら、生徒にとつてはとんでもない事件なのだ。訳し方が、少し違っていても、すぐに飛んでくる。ものごとの表層だけ捉え、しかも一つの形を「答え」として求める態度が如何に浸透しているか、思い知らされる場面である。もちろん、そのたびに、その違いが、どういふところから発しているのかを考えさせる。しかし、私の指導がなくとも、生徒たちが、そのような資料に出会い、自分で疑問を持った段階で、今回の課題の目的は、果たせたような気がするのだ。

課題の「その語句を使う場面の創作」というのは、難しかったようだ。辞書や研究書の解説を読んでも、使える対象、ふまえる背景など、様々なことを理解していかないと実際には使えない。生徒はそれでも一生懸命考えてきたが、やはり、生活の中で、それが生きて使われていないと、言葉やそれに象徴される思考の型、ひいては文化までもが継承されないのだということが、身にしみてわかった。この課題については、もう少し事前の研究が必要だった。

印刷・製本した後、この冊子を使って少しずつ発表させてみようかと考えている。自分たちで作った教科書で、自分たちが解説や疑問・感想を述べる。そして、必ず教師の評価や指導を入れて、再考させる。

課題の振り分けや資料準備の点で、一度に3クラスが限度だったので、取りあえず自分の担当クラスのみを対象としたが、学年8クラス中残り5クラスは、二期に分け、時期をずらして実施する予定である。テスト範囲や年間授業計画に関係のない内容の課題なので、それも可能である。

九州の地を離れて、二十年近くになる。その間、長らく失礼していたが、何年前から、高校段階での中国語や漢文教育についてのシンポジウムなどが、行われていることに、非常に関心を寄せていた。今回、このような形で、拙稿を特集の材料として掲載していただくことになり、心から感謝している。教育に携わるものとして、座標軸を見失わず、今現在の自分が立っている位置を検証する作業にもなった。

高校によって事情が異なるので、同じ土俵では語れない部分も多いが、皆様のご批評をいただき、これからの仕事に生かしていければ幸いである。

多岐七羊

二年五組 一番 生徒氏名
 十二番 ○○○○
 二十四番 ○○○○

楊朱之隣人七羊、既其其寃、又請楊朱之堅道之。楊朱曰、「嘻、七羊、何道者之來。」隣人曰、「多岐路、既反、問『獲羊乎』。曰『七之矣』。曰『奚之』。曰『歧路之中、又有歧途、吾不知所以也』。……心都子曰『大道以多岐七羊、學者以多方喪』。」

出典

《列子・說符》

▲余は編纂時代の別冊『春秋戦国時代の漢学』の(一)の作といわれるが、別冊完成後の事項が多いので、後人の偽作ともいう。老子の清静無為に基づいた「朝三暮四」「捉麩」などの寓話が中心の道家思想の書、沖虚至徳無経とも呼ばれる。

楊朱之隣人七羊、既其其寃、又請楊朱之堅道之。楊朱曰、「嘻、七羊、何道者之來。」隣人曰、「多岐路、既反、問『獲羊乎』。曰『七之矣』。曰『奚之』。曰『歧路之中、又有歧途、吾不知所以也』。……心都子曰『大道以多岐七羊、學者以多方喪』。」

音(下)文

楊朱の隣人羊を七ふ。既に其の寃を平ら、又楊朱の堅を請ひて之を堅ふ。楊朱曰はく、「嘻、一羊を七ふに、何道道者之來や」と。隣人曰はく、「歧路多し」と。既に反る。問ふ、「羊を獲たるか」と。曰はく「之を七へり」と。曰はく、「奚之之を七へり」と。曰はく、「歧路の中に、又歧有り、吾之く所ら知らず。反る所以なり」と。……心都子曰はく「大道は多岐以て羊を七ふ。学者は多方を以て生を喪ふ」と。

楊朱(戦国時代の思想家)の隣人羊を七(殺)した。隣人羊は羊の首をもつたものこと。楊朱の平復を願ふ羊を七(殺)した。その一(羊)は楊朱が、「一頭羊を七(殺)したのは、どうしてそんなに多岐で迷いかけるのか」と尋ねると、「獲道が多いから」と答へた。やがて人々が噂つてきたので、「羊はつかまえたか」と尋ねると、「逃がしてしまつた」と言ふ。「どうして逃がしてしまつたのか」と尋ねると、「獲道の途中にまた岐道があつて、よつと入道研友のかわからなくて捕つて来た」と答へた。これが聞いて隣人は質問も同様であると言へ、深く感心し様子を伺つた。後に弟子の心都子が楊朱の学を怠惰つ、「大道には、分かれ道が多かつたために羊を逃がしてしまふ。昔問羊を七(殺)するは、やり方がいろいろあるのだから分かれなくつてしまふ」と言つた。

解釈

品詞

字間の意味も力にも多く分かれているので、なかなか正確を要する方ないといふこと。無じて、方針がたゞなくあるために、とれを認めてよいか、迷つこと。

